世田谷村日記

石山修武

三十日つづき

十七時前稲田堤厚生館愛児園。近藤理事長プレゼンテーション。気に入って下さったようで来年春着工で進める事になりそうだ。良かった。凄いモノにする。プレゼンテーション終了後理事長と会食。チョッと羽目を外したかも知れないが、こういう日は良いだろう。二三時頃世田谷村戻り。

十月三十一日

十月も今日で終わりか。速いな時間がたつのが。

十時過ぎ十勝後藤さんへスノーボートの図面送る。十二月製作に間に合わせなくては。こういう仕事はスピードが第一だね。朝日新聞に安部譲二氏の山本夏彦追悼文が出ている。そりゃー安部さんは悲しんでいるに違いないが、こんな文章書いていたら山本さんガッカリするぜ。

十一月一日

十月は程々の収穫があった。四件の現場が進行中で、沖縄計画が前へ進む可能性が出てきた。ひろしまハウスは牛の歩みのように動いてる。厚生館プロジェクトはこれまでの研究室のキャリアに一線を画するモノが出せた。十勝スノーボートも軽いフットワークで乗り切りたい。相も変わらず大きな無駄の連続であるような気もするが、それも自分なのだから一部は引き受けていかざるを得ないだろう。大学の建築教室では私の働きどころの的がようやく絞れそうだ。足を地につけた国際化というところだろう。まだまだ何がおきるか解らぬだろうが、動じず、しかし柔軟に対処してゆく。争い事は決してきらいではないけれど、当然しないでも良い争い事からは逃げよう。学内政治は苦手だ。

一週間、山本夏彦さんの死を悼みホームページを閉じたが、いつまでも悲しんでいるのは大袈裟な衒いにも写るだろう。翁もせせら笑っているやも知れぬ。今夜ページは再開しよう。北海道東洋農機より連絡入り、スノーボートの製作図は来週なかばに仕上がると言う。楽しみだ。まさか農機具メーカーに建築を作ってもらえるとは考えてもみなかったので何がしかの径が開けるやも知れぬ。

十一月四日

良く夢を見た二日間だった。

夢の中で死んだフランク若松に会った。フランク若松とは彼が生きている間、ハッキリ覚えているが二度しか会った事がない。初回は一ノ関ベーシーでマリーンのライブの共に客としてあった。すでに若松は癌に犯され、本人はそれを知らなかったが私はベーシー店主菅原から知らされていたので、もうこの男とは何度も会えぬ事は知っていた．フランク若松は岩手県水沢市の料亭の経営者であった。ジャズが好きで、それもフランク・シナトラしか聞かぬ変わり者だった。それでいつとはなくフランク若松の仇名がついた。

何故、二度目があったのかウロ覚えである。病気が進み、入院していたのを突然出てきて、彼の料亭でごちそうしてくれた。ウナギとステーキという組み合わせでそれがフランク・シナトラの

歌には良くあっていた。食後若松はどうしても私に見せたい建築があると言い張って、山の中の正法寺という寺を案内してくれた。病院からは外出は何時間以内ですよと釘をさされていたらしい。足許はすでにおぼつかなかった。何故、若松があんな好意としか言い様の無い気持ちを私にあずけてくれたのか知る事はできない。きっと菅原が色々と脚色して彼に私を紹介したのだろう。

若松が、どうしても見せたいと思ってくれた正法寺は予想に外れて見事なものだった。巨大な茅葺き屋根がまるで背後の山を圧するようにそびえていた。ゴォーと風が吹いて山のような屋根に生えていた草や小木をゆすった。東北にはロクな建築は無いと思い込んでいた私は本当に息を呑んだ。夢の中で若松は言った。

「ベーシーでお目にかかった時、私に、お目にかかれて光栄ですと言ったでしょ。私それをお世辞でも何でもなく本当だとすぐ解ったの、それで正法寺を案内したくって」

夢の中で再び正法寺を訪ねた。自業自得大明王の生き戒名を印した位牌を持った佐藤健も一緒だった。驚いた事に山本夏彦翁までいるではないか、やはり死にながら生きていたんだ。旅はしないと言っていたのに、ここまで来るかといぶかしんだ。勿論、菅原も一緒だった。表情の無い見知らぬ女も何故か一緒に居た。

夢の中で再訪した正法寺は無残だった。修復工事の只中で大きなサヤ堂が架けられていて、あの山のような精気を持った姿は見られなかった。

フランク若松の姿も消えていた。今は昔、生前若松が案内してくれた正法寺も幻だったのだ。しかも一番鮮明な状態の幻だった。一番ハッキリした幻こそ一番リアルなものだ。今、視ている現実も又、幻なのだ。と夢の中で考えた。良く考える夢だった。

突然九十三才と名乗る老婆が登場して、正法寺の崩れかかった倉のお守りをしてると話し始めた。

夢の中でまだ行った事の無い水沢の若松の墓に行った。あの日、ゴォーッと正法寺の山のような屋根をゆるがした風が、若松の墓にも吹いていた。名も知らぬ鳥が空高く舞った。

菅原は墓参りが良く似合う男だなと思っていたら、「俺の葬式はやらないから」とブッキラ棒に言った。さっき正法寺にも居た女がここにも現れて一緒に墓参りしていた。誰なんだろうか。印象の薄い女だ。

今日の午後東大病院に行ったら佐藤健が夢の話しをした。自分がいて、その自分を見ているもう一人の自分がいる更にその全体の関係を見ている三人目の自分さえもいるという夢を見たと言うのだ。もう一つ、自分は死んでいる、その死んでいる自分を見ているもう一人の自分が居る。私が見たうつつの夢と佐藤健の夢と現実が入れ子になっている夢とは同じ類のものだったのではないか。

佐藤健の病室にベーシーで撮った写真を置いて帰った。美しいブルーのランプと花を撮ったものだ。この写真も現実のものとも思えない。

十一月の終り、玉川温泉に雪が降ったら、もう一度玉川温泉に写真を撮りに行くんだと佐藤健が言った。私もその旅はできれば同行したいと考えた。玉川温泉の帰りには一ノ関のベーシーに寄ろうと約束して帰った。

夢と現実、あるいは想像力と現実はすでに境界を失っている。病気であったり、寒かったり、他人を信用したり、できなかったりという現実は本当にそこに在り、在った事なのだろうか。私はそれを視た、触れたと幻視しているのかも知れず、幻視こそが現実なのかも知れぬ。別の言い方をするならば、世界は膨大な死者

によって構築されているのであって、現実をつかさどる様相は実は幻想なのかも知れない。歴史は死者の世界を現実に視ようとする事であろうか。

人間は死んで初めて形がはっきりすると言うが、歴史とは死者の国を現実化する作業なのか。この三日間の夢は色々と先を示唆するようだな。